

オランダ通信

第2号

共同代表: 松本敏之、大倉一郎
事務局: 横浜港南台教会 秋吉隆雄
〒234-0054 横浜市港南区港南台 7-8-29
Tel 045-833-5323 Fax 045-833-6616
郵便振替口座番号: 00210-2-97571

「細部からのまなざしを分かち合って」

共同代表

ラテンアメリカ・キリスト教ネット世話人代表
大倉一郎

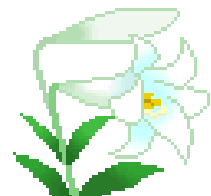
小井沼眞樹子宣教師がおよそ八か月ぶりに帰国された。急の用件を抱え時間の限られた一時帰国とのことであった。そのようなご多用の事情であったにもかかわらず、10月14日、ラテンアメリカキリスト教ネットの世話人会に時間を割いてくださった。メールや通信などによってブラジル赴任後のお働きについては聴き知っていた。しかし、リアルな体験とそこで思索されたことを直接に聴くことで、私の理解は一層掘り下げられるとともに、眞樹子さんのお働きへの連帯の意欲を新たにされた次第であった。

眞樹子さんの体験を伺っていると、その関心や働き方には眞樹子さんらしい個性が窺える。アルト・ダ・ボンダージ教会で出会っている教会員の人々のことを語る時、眞樹子さんは、一人ひとりの生活に表出してくる一見すれば細部の問題と思しき事柄への関心が深い。それらの問題は、生活の中の細部の事柄のようではあるが、貧困のもたらす非人間的状況と結びついていることが眞樹子さんの話の中から浮き彫りになっていく。その点を眞樹子さんは見過ごしてはいない。まさに「真理は細部に宿る」という賢哲の知恵が眞樹子さんの宣教師としての「まなざし」となっているということであろう。そのまなざしは、きっと、アルト・ダ・ボンダージにおける、眞樹子さんの隣人の深い望みがどのようなものであるのか、共感的に理解していくカギを眞樹子さんご自身に与えて、そのミッションをいのちの神のみ業と堅く結びつけていくのではないだろうか。

近現代のキリスト教宣教の歴史が、大航海時代の西欧植民地主義との蜜月と葛藤の残響を引きずっていることは五百年余りを経たいまも否めない。中でも主流キリスト教宣教は、「福音」とワンセットにした強者のまなざしと力の論理に

妥協して、周縁世界に独善的な干渉を持ち込んでいった側面がある。「神と黄金のために」と語ったスペインのベルナル・ディアスにせよ、「福音と通商のために」アフリカ宣教についての英国のリビングストンにせよ、同様の蜜月を伴って(縛られてというべきか)の宣教であった。ラテンアメリカやアフリカにおける「先進国からの宣教」には、いまだにそのワンセットの副作用がキリスト者の生活とその神学の中に影を落としている。

しかしワンセット的キリスト教によっては、圧倒的な貧困状況の下に生きるブラジルの人々の深い望みは、結局リアルに捉えることはできなかった。また人々の望みが福音のメッセージのもつ本来の解放的力に出会う道も備えられなかった。眞樹子さんの宣教のまなざしには、その落とし穴を越えて人々と同行する道を模索したいという祈りが込められている。それは歴史に真実をもって応え、福音に生きる方向としては間違っていないはずだ。眞樹子さんのあり様はその方向に向かって自らを注ぎ出しての働きであることを強調したい。もちろんその祈りの実現は決して容易な道ではない。一人ひとりに寄り添う歩みは、労大きくして報い少ないという現実にも立ち往生することもあるだろう。ただ、幸いなことは、眞樹子さんは貧しい人々の間で回心を受け入れる開かれた姿勢と勇気を持つようとしている。私はこのような宣教の担い手に連帯できることを感謝して受けとめたいと思っている。眞樹子さんの回心への姿勢は実のところ私たちにも不可欠の姿勢であるからだ。祈りの連帯、資金的な連帯、なによりもイエスに従う志の連帯を分かち合いたいものである。



アルト・ダ・ボンダーデ・メソジスト教会のこと

小井沼眞樹子

オリンダで生活を始めてから8ヶ月余り経ちました。まだ様々な不自由はありますが、だいぶ生活にも慣れ、ペースをつかめるようになってきました。

今回の通信では、私が遣わされているアルト・ダ・ボンダーデ・メソジスト教会(以下アルト教会と略す)をご紹介しますながら私の日常生活の一端をお伝えしたいと思います。

★地域環境

教会が建っているアルト・ダ・ボンダーデ地区は私が住んでいる海岸沿いの住宅地からバスで1時間余りの丘陵地にあります。ファベラ(スラム街)ではないにせよ、かなり悪条件の居住区と言えましょう。アスファルトはメイン通りだけでそれも穴だらけ、路地に入ると雨でぬかるむ泥道。電気はきていますが、水道の給水は3日に1度で、貯水タンクに溜めて少しずつ使います。ゴミ収集車が回っているはずなのに、住人は勝手なところにゴミを捨てるので、街角はお世辞にも「オリンダ！(なんて美しい)」とは言い難い。そして教会の周囲では、友人ジャニによれば「聞いていられないほど低俗な歌詞」の歌をがんがん鳴らし、その騒音で集会や礼拝がいつも妨げられています。その上、目と鼻の先に他の教会が2つも建っていて、讃美歌や説教の声を外に向けて流すのでこれまた大変迷惑です。

この地区で定職に就いている人たちは幸運で、多くの人たちはたぶん「職なし」か、週に1、2回の乏しい現金収入があるくらいでしょう。ルーラ大統領になってから子供の養育手当が支給されるようになり、貧しい家庭ではそれで何とか食べていると聞いています。

家はシンプルにレンガを積み上げ、間仕切りをし、屋根をつけて終わり。床は土間のままかコンクリートを敷いて、窓はないか、あってもガラスはなく木の扉を付けています。多くの家がまだ完全には出来上がっていないままで、少しずつお金を工面しては改良していくようです。家族が暮らせるスペースが十分ない家では、思春期に入ると子供たちは家を出てしまい、路上でたむろしている姿も目に付きます。するといろいろな危険にさらされ、麻薬がらみの犯罪に手を染めてしまうこともまれではありません。

初めから否定的なことばかりを書き並べましたが、町全体は人間味にあふれ、生きようとする人々のいのちの力がみなぎっているように感じます。人なつこい教会の子供たちや若者たちは、私の姿を見つけると走ってきて抱きついてくれます。大人から子供まで「マキーコ！」と名前を呼び捨てにしてくれるのが、なんとも親しさを感じて嬉しいものです。

★礼拝と諸集会

アルト教会の礼拝は日曜日の夜7時からということになっていますが、実際始るのは7時半ころです。こういう時間のずれがいわゆる「ブラジル時間」と言われるものです。

初めの30分くらいは賛美の時間で、7曲くらいギターの伴奏で歌います。その間に詩編を読みざんげの祈りもささげます。そのあと献金をし、感謝の証を自由に数人が話したあとに、やっと説教の順番が来ます。説教の時間は子供たちは別室に行って遊んで過ごしますが、これが子供でない人たちも結構自由に出入りするのです。シーンと行儀よく説教を聴く日本の礼拝とはずいぶん雰囲気が違うのでびっくりします。

説教はイヴァン・カルロス牧師が月に一度、第2日曜日に聖餐式といっしょに行います。その他の日曜日は私とジャニのほか信徒2名が順番に担当します。この説教者のために月に一度、説教準備会を行っていて、聖書テキストの掘り下げ学習や説教演習をしています。8月から11月までヨハネ第1の手紙を連続説教しました。とにかくブラジルでは身振り手振りとともに大声を張り上げて叫ぶように説教するので、私はとてもついていけない気持ちになってしまいます。

私の場合は、しゃべる言葉を逐一作文し、その原稿から目を離せないまま読むような形でなんとか説教の奉仕を果たしています。それでも外国人宣教師のシンプルな言葉を信徒たちはよく聴いてくださり、あまり途中で出て行く人がいないのが私にとっては励みになっています。

教会学校は日曜日の朝9時半から11時半まで。はじめに全員(10数人)集まり、聖書を読み、祈り、讃美してから子供クラス、ジュニアクラス、大人クラスの3つに分かれます。私は大人クラスの生徒の一人になってジャニから学んでいます。



教会学校のメンバー

週日には火曜日に祈祷会、木曜日には受洗準備会や説教準備会、冬季聖書学校準備会などが時に応じて持たれます。金曜日には私の属する信徒養成グループの

集会があり、これらはいずれも夜(7時から9時まで)の集会です。土曜日は夕方から賛美歌練習が行われることになっていますが、ギタリストの都合でしょっちゅう変更されます。今はクリスマスのためにコーラスをすることになり、外部から指導者にきてもらって練習中です。誰も楽譜を読めないし、文字も読めない人のいるこのグループにどうやってコーラスを指導していくのか、興味深く参加し学んでいます。

★ 冬季聖書学校

アルト教会が1年のうち特に力を入れている大事な教会活動は冬季聖書学校です。今年は6月29日(月)～7月3日(金)に持たれました。4月から奉仕スタッフは準備会を重ね、聖書学習(今年はヨナ書でした)、テーマ「神の愛は国境を越えて」の掘り下げ、活動のプランづくりなどを進めてきました。

5日間午後2時から午後5時まで毎日行われます。地域の子供たち、若者、大人たちが集まってきますが、最終日には奉仕者を除いて183名の参加者でした。それは本当に賑やかで元気いっぱいの大ぜいの子供たちの楽しい活動でした。

私はジャニといっしょに大人のクラスを担当しましたが、18名の参加者のうち4、5名は文字の読み書きができない方たちです。聖書のテキストをくり返し声を出して読み、何回もストーリーを思い出して語り、ゲームをしたり、共同作業を取り入れて、ゆっくり進めていきます。パウロ・フレイレ*の教育方法を十分取り入れていると感心させられました。

* ブラジル、レシーフェ生まれの世界的に有名な教育学者。



冬季聖書学校に集まった地域の子供たち

大人も子供もおやつをよく食べ、遊びの体験もとても楽しんでいました。この地域にあって、日々困難な状況に耐えている人々が、生きている喜びを味わうために、このような活動を提供することは教会の大事な奉仕なのだということがよくわかりました。

場所が狭く、トイレも足りなくて大変でしたが、感

謝なことには5日間一度もその時間帯に雨が降らなかったのです。終わったその夜から翌日の朝にかけて大雨が降りました。私は奉仕者の中に加えて頂き、何とかいっしょに働くことができるとてもしあわせでした。



お揃いのTシャツでスタッフ全員集合

冬季聖書学校の後には、日本から松本敏之牧師が10年ぶりに当地を訪問くださり喜びの再会を果たして、いっしょに基礎共同体の全国大会に参加。その後神学生を一人お迎えして、3週間に渡ってラキネット主催のブラジル研修旅行をしました。詳細は「ぼーぼ」7号をご覧ください。

★旧友、ミゲル神父との連携プレー

9月の12、13日にアルト教会の創立記念感謝礼拝が持たれました。この教会は1987年にジャニの夫、アメリカ人宣教師のダヴィ・ブラックバーン牧師によって創設されてから22年になります。ダヴィ牧師は92年に不慮の事故で感電死してしまいますが、ジャニは思春期だった息子2人を育てながら、ずっとこの教会の信徒リーダーとして奉仕してきました。地域の人々との長い信頼関係があり、どんな問題ごとも彼女の所に持ち込まれるので身を粉にして奉仕しています。そんな彼女を、私はいつも尊敬の眼差しで見えています。言葉が不足で私はあまり役には立たないのですが、なんとか自分のできることでジャニの助けになればと願っているわけです。

創立記念礼拝の日曜の朝、教会学校に行くバスの中でジャニから、最近顔を見せなくなっていた13歳の少年が、母親から外に放り出されて麻薬売買の手伝いを始めたという話を聞きました。とても頭のよい子で、私の折り紙教室でも真っ先に覚えて友だちを手伝っていた男の子です。麻薬に手を染めたら、先は牢獄か殺されるかで人生がおしまいになることは火を見るより明らかです。聖書で言う「腹わたが痛む」ような気持ちがこみあげ、この子をどうしても助けたいと神に懇願しました。

その夜の礼拝は、イヴァン牧師が特に力強く福音を説き、最後にイエスを救い主と信じたい人を前に招き

ました。すると他の人たちに混じってあの少年も教会学校の教師に付き添われながら前に出てきたのです。大粒の涙を流しながら。信じられないような出来事でした。ジャニも私も本当に驚き、そして彼を抱きしめました。

数日後、私はレシーフェのカトリック大学のミゲル神父に会いに行きました。ミゲル神父とは10年以上前にジョアン・ペソアのジュニオラード校で知り合っており、今年8月末に再会を果たしたばかりでした。

カトリック大学の中にある心理療法クリニックは貧しい家庭からは診療費をとらずに診療するということをジャニから聞いたからです。しかしいつも予約がいっぱいで去年ジャニが試みたときは取れなかったとのこと。

私の話を聞くと、ミゲル神父はすぐに診療所の責任者に電話をかけ、その日のうちに会えるよう手筈をつけてくださいました。何しろ、彼はいまカトリック大学の副学長なのですから。私は所長さんと相談し、空いているカウンセラーを探してもらい、診療の予約も2日後に取れたのです。驚くほど迅速な事の運びに、私は神の助けを感じずにはおれませんでした。



2人の男の子をミゲル神父に紹介

その後もこの家族には問題がいろいろあったやさしくないのですが、週1回、この少年と弟の2人を診療所に連れて行く奉仕をしています。ミゲル神父は来年から彼が学校に復帰できるように、大学内にある公立学校の席を探してくださいそうです。彼に良い教育を与え、10年後には素晴らしい青年に育てていることを夢見て祈っています。

★悲しい出来事

日本基督教団の暦によれば、10月の第1日曜日は「世界宣教の日」に定められています。それに合わせて、『信徒の友』10月号でも、「日毎の糧」欄で宣教師たちの奉仕教会を一つずつ覚えて祈るように企画され、アルト教会のためには18日(日)が当てられていました。私は祈りの

課題として「日々の生活があらゆる悪から守られますように。奇跡を叫び求めるだけでなく、福音を正しく理解互いに助け合う共同体として成長していけますように。」という願いを掲げました。

日本の多くの教会の人々が私たちの教会を覚えて祈ってくださったであろうその日に、けれども恐ろしい交通事故で私たちの大切な姉妹が命を落としたのです。夫の運転するオートバイに同乗しての事故でした。ぶつかって路上に転倒した彼女を後続のバスが轢いて即死。36歳の若さで、幼い子供2人を残し…。実は私はその時オランダにはおらず、そのニュースをアメリカの息子の家で受け取ったのです。孫たちに会うために10月に2週間の休暇を頂いて日本とアメリカを旅行中だったのです。

「神さま、なぜですか?」と問い続けました。なぜ、多くの教会の人々が祈っていたであろうその日に、こんな悲惨な事故が起こったのか。熱心に祈り、よく感謝し、いつも他の人たちのためにとりなしていた信仰深い彼女の事を思い出し、ご家族や教会のみんなの嘆き悲しみを思って、帰路の機上で涙するばかりでした。

ところが帰ってみて驚いたことに、この悲しみのどん底で教会ではみんながこころを一つにし、遺族とともに泣き、彼女の信仰の模範を思い出して語り、まさしく神の愛を体現する共同体としてそこに存在していたというのです。



私の横でHappyバースデーを歌ってくれた彼女が…

だれも神の愛を疑う人はおらず、むしろより一層信仰を強められて祈っていた。「どうしてこの日にこんな事故が」と涙する私に、この困難な時のなかでまさしく地球の向こう側からささげられていた祈りが届いていたのですよと、ジャニは静かに語ってくれました。

悲惨な状況でこそ働く愛と信仰の力を深く教えられたのは私自身でした。それからは、地球を半周してつぎつぎと日本から祈りの葉書が届くたびに、しみじみ神の愛がこころに沁み涙が出ました。

悲しみの時も喜びの時もみんなといっしょにここにいう、と思いを熱くさせられたことでした。



アルト・ダ・ボンダーデ・メソジスト教会の音楽献金のお願い

アルト・ダ・ボンダーデ教会の礼拝賛美はギターの伴奏でなされますが、目下教会にはギターを弾ける人がひとりいるだけで彼の技術も万全ではありません。また歌うメンバーも音程が正確にとれない人が多く、まして五線譜を読む人はひとりもいません。それでも礼拝では、前半30分くらい明るく元気に歌って神さまを賛美し、気持ちを高めていきます。賛美グループを育成することは教会の差し迫った課題です。

またこの地区には人間としての能力を高める機会やスポーツなど楽しい活動が何もありません。小額でも月謝を払える人はごくわずかですし、市の中心街まで通うためのバス代もない。本当にため息が出るほど不平等で非人間的な現実で、若者たちはたやすく麻薬の虜になって暴力事件や殺人事件が頻発することになってしまいます。

今年、私たちは外からの献金でギター4台とエレクトーンを購入できました。これらを有効に活用して音楽教室を開き、教会の賛美グループ養成と同時に、地域にも開かれた活動をしていきたいと願っています。しかし、教会の財政は会員の献金では到底たらず、ノルデステ教区からの支援金で不足部分が賄われ、また外部からの献金にも支えられている実状で、音楽教室のための資金がありません。

私たちの音楽プランは次のようなものです。

- 1) ギター教室とエレクトーン教室（地域の人々も参加できる）
それぞれ週に2回教室を開く。
一人の講師に謝礼として300レアイス（約1万5千円）支払う。
合計600レアイス → 年間7,200レアイス
 - 2) クリスマスのためにコーラスの指導をしてもらう。講師に謝礼。
 - 3) 典礼と教会音楽についての講習会を年に数回行う。講師に謝礼。
 - 4) その他、楽譜のコピー代、マイクや音楽機器の修理費や購入費。
- 総計して、年間10,000レアイス（約50万円）が必要です。

以上のような状況と必要性のもとで、主にある兄弟姉妹の皆さんに音楽献金をお願いしたいと思います。

一 口：3000円

振込先：「共に歩む会」郵便振替口座：00210-2-97571

「音楽献金」と明記して振り込んで下さい。

このことを通して、離れたところにあっても神の家族として共に生きていく喜びと希望を分かち合うことができますようにお祈りしています。

小井沼眞樹子

オランダの小井沼眞樹子牧師を訪ねました！

松本 敏之

今年の7月18～20日、私は10年ぶりにオランダのアルト・ダ・ボンダーデ・メソジスト教会と小井沼眞樹子牧師を訪ねました。貧しい教会ですが、シュラスコ（焼き肉）と眞樹子さんの焼きそばで、歓迎会をしてくださいました。日本の焼きそばは、この10年の間に「ヤキソバ」としてブラジル中に広まってきました。教会でも「マキコのヤキソバは最高！」と大人気。

19日夜の礼拝中に、町中が突然停電！真っ暗の中

での聖餐式は初めての経験でした。この日、教会の少女たちが揃いのTシャツでダンス付きの賛美を披露してくれる予定だったのですが、音響も使えないということで見られませんでした。残念！

眞樹子さんは、サンパウロと違い、この地では誰も日本語を話す相手がいません。（私の場合は家族がいました）。教会の人たちは、眞樹子さんが私と日本語で話すのを興味深そうに見ていて、「今日、マキコは大満足！」と言っていました。眞樹子さんが教会の人たちに受け入れられ、愛されている一端を見させていただきました。

その後のことについては、ラテンアメリカ・キリスト教ネットの機関紙『ぼーぼ』をご参照ください。

会 計 報 告 (2009.4. 6～2009. 10.31)

～ 会計報告の詳細は省略しています ～

～ 会計報告の詳細は省略しています ～

編集後記

事務局 秋吉隆雄

「オランダ通信」2号をお届けいたします。アルト教会が建っている地域と教会の実情を紹介してくださいました。

貧しい地域なので悪に走る人、病む人もいます。

う。しかし、教会は熱い交わりを作って共にあろうと懸命です。眞樹子師は敬意を持って受け入れられ、不自由な言葉の中で素晴らしい働きをしています。お働きに祝福を、そして無事故をお祈りください。また、「音楽献金」にもご協力下さい。